

「イエスと弟子の無理解」（ルカによる福音書九章三七〜五〇節）

1 ガリラヤ

ガリラヤという地名は、聖書を知っている（親しんでいる）人には、やはり特別の名前です。

ガリラヤはキリスト・イエスがそこで育ち、メシアとしての自覚を深め、ついに宣教を開始したところです。またペトロをはじめ弟子が招かれ、その意味では、教会が生まれたところでもあります。

このガリラヤでのイエスの働きを、私どもはルカによる福音書によって、四章〜九章と辿ってきて、今日の聖書箇所は、その働きの終わりが伝えられているところです。いくつかの小さなエピソードがあります。今日はそれらをまとめて取り上げるようになります。

聖地旅行というものを私は（残念ながら）したことがありませんので、現地に立って、その風に吹かれるという経験をもっていません。そうしていたなら、あれこれ頭で考えなくても、感覚的にすぐに分かった、入り込めた、簡単に想像できた、そうしたものもあつたかも知れません。

しかし、福音書を読むことによっても、私ども、ガリラヤについて、そこで活動するイエスとその弟子たちの姿について、十分、生き生きしたイメージを与えられることができます。

ガリラヤといえば、何よりガリラヤ湖（ゲネサレト湖）を思い起こします。自然景観の素晴らしさはいうまでもなく、生活に深い関わりをもつ湖です。私どもは、第五章で、ガリラヤ湖の漁師たちがイエスの弟子として招かれ、お供することになった次第を読んでいます。ペトロ、ヤコブ、ヨハネがそうでした。また第八章には、この湖を舟でわたって、対岸ゲラサの地で伝道したことも書いてあります。突然の嵐の中波と風を従わせたイエス。この方がどういう方であるか、そこで明らかにあります。

他方、ガリラヤが豊かな農作地であることは、私ども、同じく第八章で、種を蒔く人のたとえで明らかかなのではないでしょうか。農耕に従事していればこそ、種まきのたとえは分かるのです。

ガリラヤ湖の湖岸には、いくつも町があり、町には会堂があります。その中心地の一つカファルナウムには、ローマの百人隊長も駐在していたことが、第七章で彼の僕がいやされた記事から分かります。

その他にも、湖岸ではありませんが、たとえばガリラヤの西部、ナザレに近いナインという町も思い出します。第七章で、その町のやもめの一人息子が、イエスによって生き返ります。あるいは、ガリラヤ湖の北岸から少し山に入ったところ、ベトサイダという町も、覚えておられるでしょうか。五つのパンと二匹の魚で五千人を養った奇跡のあつたところです。

イエスは弟子とともにガリラヤ中を巡り歩き、町や村の会堂で、水辺でも山の上でも宣教します。じつは四章には「ユダヤの諸会堂に行つて宣教された」（四四節）とあつて、ガリラヤの外にも出かけて行つたのです。イエスの評判はガリラヤを越えて

広がり、ユダヤ全土から、「テイルスやシドンの海岸地方から」（六・一七）、相当離れたところからも人々は押しかけていたのです。反対にイエスに敵対した人たち、やがてイエスを十字架につけるファリサイ派や律法学者もすでに顔を見せていたことも、ところどころで私どもは知っています。

そのガリラヤでの宣教活動が一つの終わりを迎えようとしています。もう十分やった、やり尽くしたからというわけではありません。イエスはメシア（キリスト）としての歩みの転機が来たことを悟ったからです。（今日の箇所次の段落）。

イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた（五一節）。

こうしてイエスは、ガリラヤから、いまやエルサレムへ向かおうといたします。生半可な決意ではありません。今日の箇所が、ガリラヤにおける最後の日々を伝えているとすれば、先週私どもが聞いたイエスの変貌は、神の子の栄光を示す、まさにガリラヤにおける最後の啓示でもありました。

2 山の下で

今日の聖書箇所、祈るため山に登っていたイエスが、ペトロ、ヨハネ、ヤコブと共に山を下りたところから始まります。

翌日、一同が山を下りると、大勢の群衆がイエスを出迎えた（二七節）。

イエスが三人の弟子を連れて山に登った、祈るために登ったことは、もちろん知れ渡っていました。むしろいつ戻るのか待たれていた。大勢の群衆はたんに集まったのではなく「出迎えた」のです。

イエスを待っていた。今や遅しと待ちかまえていました。というのもそれには理由がありました。群衆の中に、悪霊に取りつかれた一人息子をもっていた父親がいて、そのいやしをイエスの弟子たちに頼んだだけでもできなかったというのです。この弟子たちとは、イエスと一緒に山に登らなかつた弟子たち、下で待っていた残りの九人です。マルコによる福音書は、このところ、弟子たちは大勢の群衆に取り囲まれて、律法学者たちと議論していたとあり（九・一四）。困り果て、周りから詰め寄られているふうに描かれています。イエスのいない弟子たちは、まったくの無力さの中にとたずんでいました。群衆だけでなく、弟子たちも、イエスの下りてくるのを待っていたのです。そこにイエスが戻ってきます。父親はイエスに願い、訴えます。イエスはこう語り、子供をいやされます。

イエスはお答えになった。「なんと信仰のない、よこしまな時代なのか。いつまでもわたしは、あなたがたと共にいて、あなたがたに我満しなければならぬのか。あなたの子供をここに連れてきなさい」。その子が来る途中でも、悪霊は投げ倒し、引きつけさせた。イエスは汚れた霊を叱り、子供をいやして父親にお返しに

なった。人々は皆、神の偉大さに心を打たれた（四一〜四三節）。

ここで私どもが聞き逃してならないのは、吐露されたイエスの嘆きではなく、むしろここでもイエスがこれまでガリラヤでしてきたように、病人をいやし、悪霊の働きを許さなかったことです。

イエスは、悪霊につかれた一人息子をもった父親を憐れんでくださったのです。「父親にお返しになった」というような言葉は、ナインのやもめの一人息子を生き返らせたときと同じです（七章）、会堂長ヤイロの娘を生き返らせたときの両親への慰めとも同じです（八章）。周りを取り囲んでいた人々はみな、神の偉大さに心打たれざるをえなかったのです。

このイエスの偉大なわざに、改めて遭遇した弟子たちは、しかしかえってイエスを正しく理解できなくなってしまうようです。このいやしの後のこととして聖書が伝えていることを読んでみます。

イエスは弟子たちに言われた。「この言葉をよく耳に入れておきなさい。人の子は人々の手に引き渡されようとしている」。弟子たちはその言葉が分からなかった。彼らには理解できないように隠されていたのである。彼らは、怖くてその言葉について尋ねられなかった（四三〜四五節）。

これは、イエス自身による受難予告とされています。われわれの先生イエスがまたもや偉大な業をなした、群衆に歓迎され、喝采を受け、皆が心打たれている、弟子たちも悪い気分はしなかったでしょう。しかしその中でイエスのこの自らの受難を示す言葉は正しく理解されることはありませんでした。

同じ九章で、ペトロの告白（あなたは神のメシア）を戒める形で、苦難と死、そして復活をイエスは予告しています。同じ章で、二回目の予告です。にもかかわらず弟子たちが、メシアとはどのような方か、イエスの教えをまだ理解していないことが、明らかにになります。

イエスとはどのようなメシアなのでしょう。その方を信じ、従うとは、どのようなことなのでしょう。他の先生（ラビ）について行くのと、どこが違うのでしょうか。

3 イエスに従う者の在り方

さて今日の箇所には、いくつかのイエスの言葉が、簡単な状況説明と共に、並べられています。共通しているのは、イエスの言葉を弟子がちゃんと理解していないということです。イエスが、苦しみを受ける、十字架にかけられる救い主として理解されていないということです。

弟子たちの間で、自分たちのうちだれがいちばん偉いかという議論が起きた。イエスは彼らの心の内を見抜き、一人の子供の手を取り、御自分のそばに立たせて、言われた。「わたしの名のためにこの子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしをお遣わしになった方を受け入れ

るのである。あなたがたの皆の中で最も小さい者こそ、最も偉い者である」(四六〇四八節)。

だれが一番偉いか、こういう議論が起きるのも、自分たちが、どんな方につき従っているか、分かっているからです。

閉鎖的な小集団で、こうしたことは、起こり得るかもしれませんが。しかし弟子たちの間でそういう議論が起ることは、理解しにくいことですが、しかし事実起こったのです。それに対してイエスは一種の実物教育をなさいます。一人の子供の手を取り、御自分のそばに立たせます。この子供は、先ほど山から下りてきてイエスがいやした子供だという説もあります。いずれにせよ、子供は、この時代、貧しい人と同じく、もっとも小さな者と見なされ、旅人の足を洗うようなことをさせられていたのです。

そのような小さい者、貧しい者を受け入れ、仕える、へりくだる、これが偉い人です。他のために苦しむ救い主を信じ、従うことは、この世の人の在り方、この世の価値観とは自ずと異なった生き方にならざるをえないのです。この言葉を聞きながら弟子のヨハネは我が意を得たり、ほめられると思って、こう言ったというのです。

そこで、ヨハネが言った。「先生、お名前を使つて悪霊を追い出している者を見ましたが、わたしたちと一緒にあなたに従わないので、やめさせようと思いました」。イエスは言われた。「やめさせてはならない。あなたがたに逆らわない者は、あなたがたの味方なのである」(四九〇五〇節)。

このヨハネは、いうまでもなく、ペトロ、ヤコブと一緒に、山の上でイエスの変貌を目撃した人です。一番若くイエスが愛していた弟子です。しかし彼がしようとしたことは、イエスによつて、それは間違いだと言われてしまいました。

何が悪いのでしょうか。ヨハネは、自分たちの集団と、それ以外の(個人であれ集団であれ)集団との間に境界線を引こうとしています。イエスの名で、われわれもできないことをしている(実際弟子たちは、先ほど悪霊を追い出せず立ち往生していたわけですが)としても、やはりわれわれの仲間ではない、やめさせるべきだということです。

イエスは同意しませんでした。神の恵みの働きは、もっと大きい、もっと広いのです。そもそもイエスの弟子は十二人だけではないのです(一〇・一)。それゆえ反対しない者は味方。ヨハネは、その神の大きな働きに目を向けるべきです。「逆らわない者は味方」、この真理は小さくありません。

これは今日の私どもに対しても語られています。私どもは教会として、はっきりイエスを主として告白し、これを宣べ伝えていきます。いささかもこれを後退させることがあつてはなりません。しかし同時にそれは、神様がこの世界を支配し、恵みをもつて働いておられることを前提していることです。その働きに、あの十二人の弟子、使徒たちも、そして私どもも、あずかることを許されている。その恵みを、またあずかることを許されているにすぎないという謙遜さを、いつも私ども教会は忘れてはならないのです。